

■ 年頭挨拶

新年のご挨拶

日本オペレーションズ・リサーチ学会副会長
近畿大学 権藤 元



皆さま、あけましておめでとうございます。

21世紀もあと数年と間近に迫った本年は、ORにとって新世紀に大いに発展する基盤を培う年であることを祈念しながら、ひとこと年始のご挨拶を申し上げます。

と申しましても堅苦しい挨拶ということではなく、私が見ました初夢を紹介させていただきたいと存じます。いやこの原稿は旧年中に書いていますので、正しくは、見るであろう初夢でしょうか。

ところで初夢を紹介するまえに、初夢を見た背景について、触れさせていただきます。

それは、旧年10月の筑波大学で開催された秋季研究発表会の2つのセッションです。その1つは第1日午後の企業人セッションで、このセッションの主旨を森村先生が述べられ、企業の方4名を中心にパネル・ディスカッションが行なわれました。2つ目は第2日午後の公開討論会で、このセッションの主旨を梅沢先生が述べられ、伊理会長をはじめ大学側3名と企業側2名の方々による話題提供に始まり2時間に及ぶ討論が行なわれました。前者はOR広報研究部会で論議された1つの成果であり、後者はOR基本問題検討委員会で検討中の内容を紹介されたものです。その内容は2つとも充実したもので興味深い示唆に富んだものでした。このようなセッションが研究発表期間中に行なわれることは意義深いものと思いました。

なお、それぞれその内容の一部は前者については本誌先月号に紹介され、後者については来月号に紹介される予定と聞いています。

以上が私が見た初夢のインプットにあたる事項かなと思いますが、企業から大学へと2足のわらじを履いた者の見た初夢を紹介しましょう。

初夢の前座は、諸先輩が今まで築かれてきました学会発展の姿が走馬燈のようにめぐり心地よく

過ぎてゆきました。ひとこと言えば、30数年の歴史をもつ小さな学会が、会員も増加し正会員3000名に達しようとしています。もと学会長の近藤次郎氏が日本学術会議議長になられたり、科学研究費もその位置づけを確保するなど公的地位も認められました。国際学会での活躍も活発で、海外の著名な賞を受賞した研究の話題もあり、すばらしい研究の成果も多々あげられています。また実学としても、しかるべき企業では着実にその成果をあげているといえます。

ところが、実務に活かされたORは成果をあげても、それはその業務の成果であって、企業の中で広くORの成果とは認識されていません。一部の関係者しかORの成果とは見ていないわけです。ORはそれを使って成果をあげればあげるほどORとは言われないという姿が見えてきました。

この現象は企業だけでなく、研究の分野でも同様といえましょう。たとえば、他の工学分野の研究者が明らかにORを使ったとしても、それはORの成果とは言わないのではないのでしょうか。

というようにいつしか、心地よい走馬燈は過ぎ去り、そのあとにはORの危機としか言いようのない局面が展開されてきました。たとえば、以前にはORの成果をあげていた企業の中から後継者の養成に失敗したとの声を聞くことも多くなりました。大学の中でも教育の環境は変化し後継者養成の困難さの話を聞きます。大学の中でも企業の中でも後継者の養成は決して順調とはいえません。

また企業の方からは研究発表会に出席しても大学の先生方特に若い方の発表は難しくてわからない。やっとわかったもののその内容はあまりにも現実離れた仮定の上にきわめて局所的な課題と

して展開されている。理論のための理論、研究のための研究になり過ぎていないか。一方、研究者からは企業の事例を聞いても自分の研究には役に立たない。現実の場の特殊性の影に隠れて安易な妥協に満足して、使えそうな新しいモデルに関心を持つていない。たとえば何でもシミュレーションといった取り組みの中では新しいモデルもその革新的な解法も浮かばれない、などなど、お互いに他を批判したい気持ちを多くもっている。

ORのいのちは「モデルづくり」にあるといわれますが、モデルの解説紹介はあっても、モデルづくりの解説紹介はきわめて少ない。つくられたモデルのみがORと知っている方々も結構多い。

さらに、もう少し基本的な問題として、「問題解決のためにORを」から「問題発掘のためにORを」へという声も一部に留まっている。景気が底割れし回復困難な不況の恐れのある現在こそORは脚光を浴びてもよいはずなのに、などなど。さらに、「ORとは何か」についてのアイデンティティーが欠如しており、アイデンティティー確立のための組織的取り組みもほとんど行なわれていなかったという合唱の声が聞こえてくる。という具合です。

このように初夢は続きます。しかし、真っ暗で先が見えないわけではありません。このような中にも、たとえば、昨秋の研究発表会の2つのセッションの討議の中に解決のヒントは見えています。そのときの話題を企業の方はどういう考えをもっているか、研究者はどのような考えをもっているかについて整理して、お互いが相手に理解を示す立場に立つならば、それぞれ自分の分野に従来どおり取り組むとしても相当改善されるものと思われる。さらに、OR教育とかORリテラシーなどいろいろの話題もありました。

また、ORとは意識しないでORを活用・実践し

ておられる方も多い。このことは、たとえば、OR企業サロンの話題からもうかがわれるし、「ダウンサイジングはORから」などというビジネス雑誌の記事も見られます。ORを活用する姿を誰にでも見える姿に描くことも今まで怠っていたことではないでしょうか。こうして、「ORとは何か」についてのアイデンティティーも見えてくるでしょう。

というように、次第に初夢は明るくバラ色の情景が眺められてきました。それは、個々に具体的に描かれていて、唐突でなく現状をベースにいま1歩進めた地についた提案であり、実現可能と思われました。しかし、まことに残念なことにそのあとすっかり安心して眠ってしまい、その個々の内容は目覚めた今となってはどうしても思い出せません。決して難しいことではなかったという印象は残っているのですが、

そう、1つだけ頭に残っていることがあります。それは、ORの有効さを示す1つの指標として、次の視点があることを指摘していたことです。たとえば、今まで見えなかった気がつかなかった事柄をORにより見つけるという視点です。確かに、「ORは今まで気づかなかった機会損失を知ることができる」とよく言いわけますが、今まで気づかなかったなにものかを発想し創造することができた醍醐味を体験しますと、その感激は大きく以後はORを止められなくなるでしょう。ORがこの発想なり、創造の過程をいかにサポートし得たかは重要な1つの指標でしょう。ORはモデルづくりを通じて新たな発想が得られてこそ役に立つのではないのでしょうか。

初夢の思い出せなかった部分は、皆さまによって明らかにされることを期待して新年のご挨拶の結びとします。